



写真-1 初夏の釜谷池（令和2年5月撮影）

■ 四段の重ね池～釜谷池群

写真-1 は、第二神明道路・明石サービスエリアの南西にある四段の「重ね池」の最下段に位置する釜谷池です。重ね池は、上から順に、岩蛇池（いわじゃいけ：貯水容量=29,000m³、満水面積=2.0ha）、中笠池（V=26,000m³、A=2.1ha）、稲葉池（V=31,500m³、A=2.3ha）、釜谷池（V=120,000m³、A=5.4ha）で、釜谷池が最も大きく、これら四つの池はまとめて「釜谷池群」と呼ばれています。

釜谷池群の西側斜面には、白鳳時代から中世にかけての遺跡である登り窯跡が散在し、これが池の名称の由来となっているそうです。また、最上段の岩蛇池は、周辺で陶器の製造に適した粘土が採掘され、それが蛇の皮のようであったことからこの名が付いたと言われています。さらに、釜谷池の西にある高丘東公園付近には、登り窯で働く人たちがそのほとりに居住したとされる「釜井谷池」（昭和39年に撮影された空中写真では、高丘東公園のある所は溜池であった）がありました。

西宮市にあるニテコ池のように、粘土を採掘した跡を池にしたのでしょうか。そういえば、ニテコ池も三段の重ね池です。いずれにしても、鋼土（はがねつち）の材料となる透水係数の小さい粘性土が豊富ということで、池を築造する材料には恵まれていたということです（『ひょうご水百景』（阪神No.16 参照）。

なお、釜谷池群の施設管理者は中之番水利組合で、受益面積は35haです。



写真-2 春の稲葉池



写真-3 初夏の中笠池



写真-4 冬の岩蛇池

■ 終戦直後に襲来した阿久根台風が大水害をもたらす

「弱り目に祟り目」、「泣き面に蜂」とは、このことを言うのでしょうか。終戦直後の混乱期、昭和 20（1945）年 9 月 17 日、台風第 16 号は、鹿児島県川辺郡枕崎町（現・鹿児島県枕崎市）付近に上陸します。上陸時に観測された最低海面気圧は枕崎市での 916.1hPa。上陸地点の名称をとったこの「枕崎台風」は、「室戸台風」「伊勢湾台風」と並んで「昭和の三大台風」と呼ばれ、死者 2,473 人、行方不明者 1,283 人、負傷者 2,452 人という甚大な被害をもたらしました。終戦直後のことで、気象情報が少なく防災体制も不十分であったため、各地で大きな被害が発生しましたが、特に広島県では死者・行方不明者合わせて 2,000 人を超え、原爆の惨禍に追い打ちをかけました。

ところが、台風はこれで終わりではありませんでした。枕崎台風から 1 ヶ月もたたない 10 月 10 日に鹿児島県出水郡阿久根町（現・鹿児島県阿久根市）付近に上陸した台風第 20 号は、その後北東に進み周防灘から中国地方を通って日本海に出て、能登半島付近を通過、津軽海峡の西海上で消滅しました。台風の接近前から前線の活動により雨が降り続き、九州から中部地方にかけて 200～300mm の期間降水量を記録、各地に河川の氾濫や土砂災害・浸水被害をもたらし、死者・行方不明者 451 人、負傷者 202 人、全半壊家屋 6,181 戸を数える大災害となりました。

台風の進路の東側に位置していた兵庫県においても、期間降水量が神戸で 292mm、洲本で 364mm を記録し、206 名という多くの犠牲者が出ました。特に、溜池の多い播磨地域では、これらが次々に決壊して大災害を引き起こしたのです。

加古川水系の河川では堤防決壊 6 ヶ所、橋・道路災害 12 ヶ所に及び、特に左支川的美囊川流域では死者 31 名を出しました。また、喜瀬川では上流部の長法池が決壊して氾濫流が下流へ押し寄せ、天満大池や河原山池、新池などが次々と決壊して多くの人命が失われました（『ひょうご水百景』（東播磨）No.38 参照）。

■ 重ね池がドミノ倒しのように決壊した大久保大水害

阿久根台風によって明石郡大久保町※¹（現・明石市大久保町）では、釜谷池群やその周辺の溜池約 30 ヶ所がことごとく決壊、大量の濁流が低地に流れ下り、約 100 戸が泥水に浸かり 17 名の尊い命が失われました。地元では「大久保大水害」の名で記憶されています。

谷八木川流域の水利組合関係者等から「大久保大水害」の状況を聞き取り調査した結果は、概ね以下のとおりです。

① 大久保地区（旧街道沿い）

昭和 20（1945）年 10 月 9 日の早朝、何処からともなく「池の土手が切れた」という声が伝わってきた。…2 階西の窓から外を見ると一面池のよう。午前 9 時頃、国鉄の堤防が切れ、線路が枕木を付けたまま梯子のように空中に垂れ下がった状態になった。

② 中之番地区（釜谷池群を管理する水路組合）

1 週間余り雨が降り続いた 10 月 9 日早朝、教専寺の半鐘がなり、上流の岩蛇池から切れ始め、順に中笠池、稲葉池、そして一番大きな釜谷池の土手が崩れ、濁流が一気に東川（あすまがわ）を下って行った。谷八木川に架かる国道 2 号の橋（大町橋）が落ちたと聞いた。

③ 松陰（まつかげ）地区（上川池、下川池、大池、口無池、雑菜池等を管理する水利組合）

上流の溜池からどんどん土手が切れ始め、櫓の上から見ると、白い波がどっと押し寄せてくる感じだった。これらの濁流は谷八木川に流れ込み、国鉄と交差する地点では流木等が詰まりダムのように堰き止められて多くの犠牲者が出ることとなった。

④ 松陰新田地区（鳴池、中鳴池などを管理する水利組合）

上流の溜池から切れ始め、大きな鳴池（なれいけ）の土手も一気に切れ、谷八木川へ流れ込んで行った。

ということで、多くの証言をもとに大久保水害の状況を整理すると、いずれの地区も上流の溜池から順にドミノ倒しのように決壊していったようです。

重ね池の場合、最上段の池が決壊すれば、その氾濫流が下流の池に流れ込み、その池がまた決壊して下流の池へと流れ込む、まるでドミノ倒しのように溜池を次々に決壊させていきます。中でも大きな貯水量を有する釜谷池群の決壊は、下流域に大きな影響を与えたものと思われます。

これらの溜池は枕崎台風の雨で満水になり、田んぼに水を必要としなかった時期なので、ほぼ満水の状態で阿久根台風を迎えてしまったと思われます。加えて、1週間余りの前期降雨があったのでなおさらです。

釜谷池群など多くの溜池が決壊し、濁流は小さく細い東川をくだり、旧街道沿いを通して国鉄下の隧道へと流れ込み、一方谷八木川沿いに分布する上川池、下川池や鳴池などは谷八木川を一気に下り、同じく国鉄の土手へと向かいました。

そこでは、上流からの流木等が詰まって堰き止められ、多くの犠牲者が出ました。

釜谷池群では、10月初旬に溜池の泥浚え・池干しが行われ、東の松陰新田にある溜池では11月に泥浚え・池干しをしていましたが、現在は行っていないようです。

もし田に水が不要になった時点で樋抜きだけでもやって池の水位を下げていたら……。

太平洋戦争に男手を取られて、溜池の管理が十分にできていなかったことも、決壊の一因かもしれません。

※1 明石郡大久保町：明石市は、昭和26(1951)年1月10日に明石郡大久保町・魚住村・加古郡二見町を編入し、現在の市域となる。

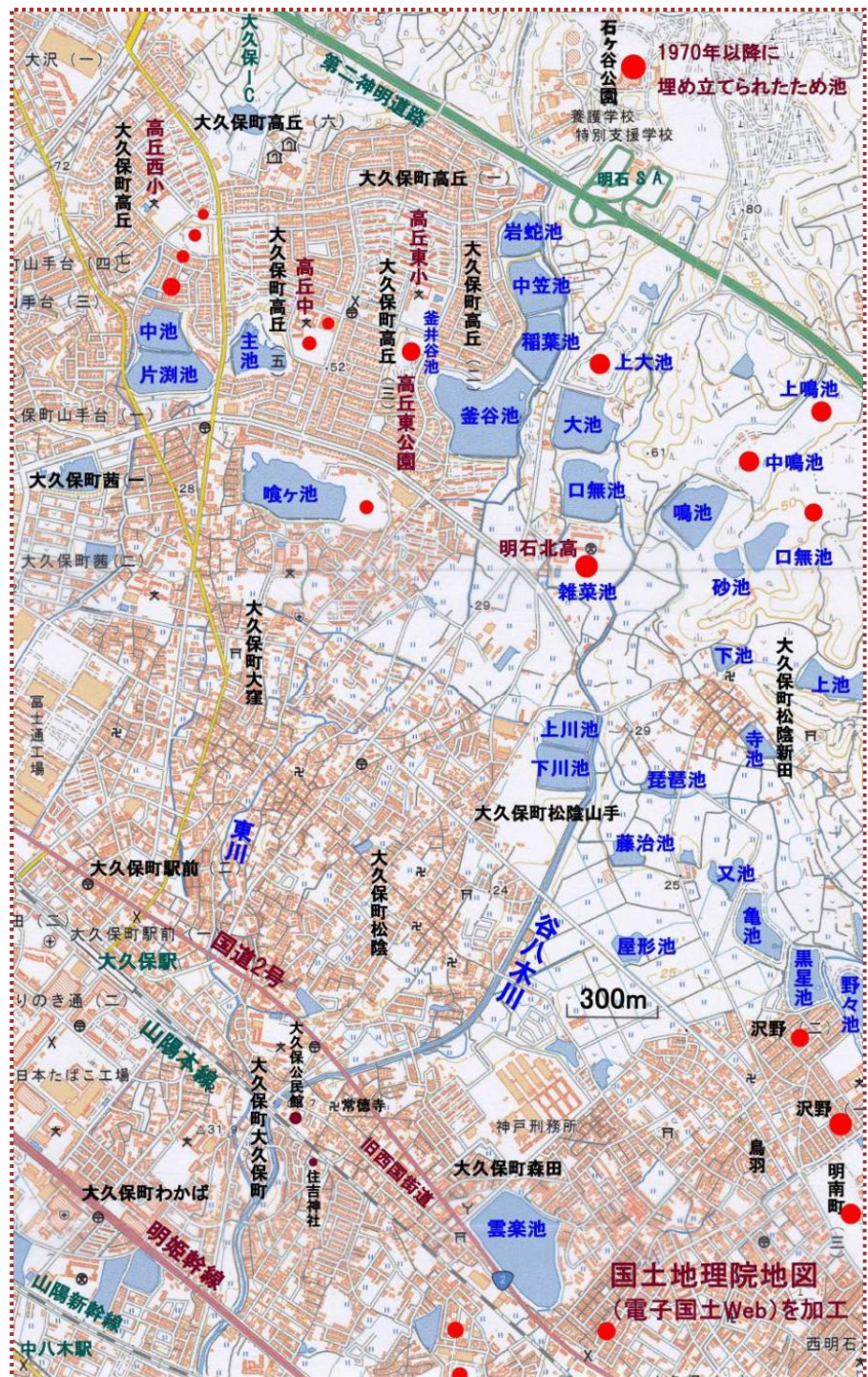


図-1 大久保台地の溜池の分布と埋め立てられた溜池の状況



写真-5 谷八木川に架かる JR 山陽本線・東川橋梁



写真-6 国道 2 号・大町橋下を流れる谷八木川

■ 大久保台地には重ね池が 6 ヶ所もあった

写真-7 は、開発の波が押し寄せる前の昭和 39 (1964) 年に撮影されたものです。

当地域は、印南野台地の東端に位置し、大久保台地と呼ばれています。台地面には谷八木川や赤根川などの小河川しかなく、近世以降農業用水確保のために多くの溜池が造られました。

大久保台地には、重ね池が多いという特徴があります。3 段以上の重ね池が 6 ヶ所もあり、その現状は以下のとおりです。(西から順に)

- ・片淵池群 (6 段: 4 池が埋め立て)
- ・主池群 (3 段: 2 池が埋め立て)
- ・釜谷池群 (4 段: 現在も 4 池すべて使用中)
- ・雑菜池群 (5 段: 雑菜池と上大池が埋め立て)
- ・鳴池群 (3 段: 中鳴池、上鳴池が埋め立て)
- ・砂池群 (3 段: 最上段の池が埋め立て)

大久保大水害では、溜池がことごとく決壊しました。釜谷池群のほか、谷八木川左岸の松陰新田にある鳴池(なないけ)や中鳴池などの溜池も決壊しています。

松陰新田は、明石市教育委員会発行の明石市史資料第一集『播磨国明石郡松陰新田村検地帳並に田畑名寄帳』によると、丹波篠山 5 万石の藩主・松平忠国が、慶安 2 年 (1649) 8 月に明石 7 万石の藩主となった際、すぐに松陰新田 13 町 7 反 9 畝 4 歩 (≒14ha) を開き、21 人を入植させたとあり、これが村のはじまりと言われています。

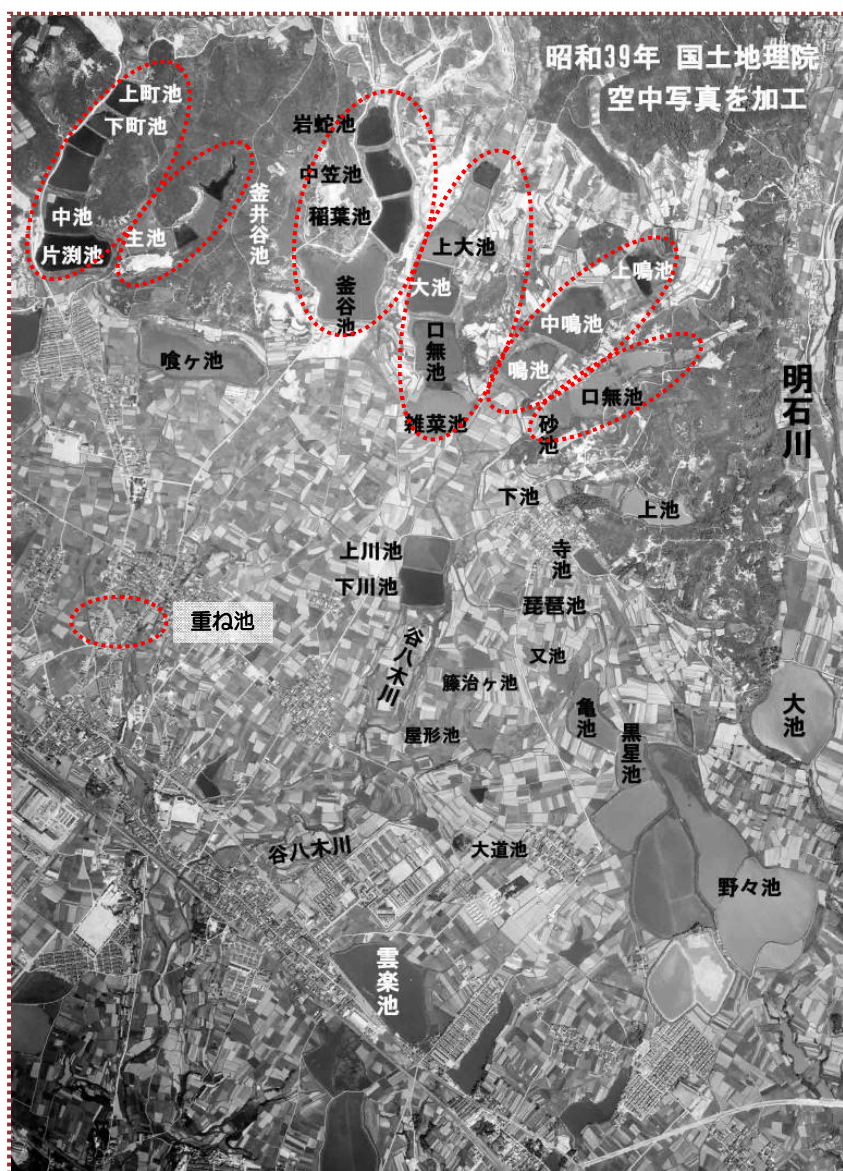


写真-7 溜池および重ね池の分布状況



写真-8 口無池（左の堤は大池・ゴルフ練習場）



写真-9 鳴池

その頃、松陰新田のあたりは、西国街道※²（山陽道）に近いという地の利に恵まれていながら水利に恵まれていなかったことから、忠国は9つの池を築造するよう命じたそうです。新田が完成したのは明暦元（1655）年です。

なお、9つの溜池のうち、現存するのは、鳴池（写真-9）、砂池、口無池（写真-8）、上池、下池、寺池の6つで、他の3池は昭和45（1970）年以降に埋め立てられています。

※2 西国街道：現在の国道2号とJR山陽本線の間を、国道2号に並行して走っている道（写真-10）。後述の大久保公民館の前を通る道である。播磨国内の宿駅は、東から明石、大久保、加古川、御着（ごちやく）、姫路、鵜（いかるが）、正條、片島、有年（うね）。大久保宿は、JR大



写真-10 旧西国街道（大久保橋から東方向撮影）



写真-11 大久保宿・本陣跡

久保駅の北側道路のさらに1本北の道路（旧西国街道）を東に約1km歩いた場所にあったとされる。本陣は常徳寺という真宗の寺の西隣にあった（写真-11）。

■ 大水害からの復旧

終戦直後の混乱期に起きた大水害からの復旧作業は、労働力不足が深刻で、中学生や女性、高齢者を含め村を挙げての取り組みが数年続いたそうです。1軒につき1人動員という形で復旧工事が行われ、動員された人には賃金が支払われています。溜池を多く抱えている地区では復旧に4年以上かかったとか。

また、谷八木川に架かる国道2号の橋（大町橋）が流失したことについてはP.2で述べたとおりですが、その復旧については神戸の進駐軍設営隊約50名の手で行われたそうです。10月12日の早朝、トラックやジープに乗って現地に到着した進駐軍は、8時に作業を始め、機動力と物量により16時には落橋箇所上架橋、車が通れるようになったそうです。

土手が流失した国鉄の修復には約2年を要し、その間、西明石駅と土山駅で折り返し運転が続いたそうです。

■ 水害犠牲者の慰霊と水害を後世に伝えるために『大水害追悼之碑』を建立

JR大久保駅を降りて、北側を東西に通る旧西国街道を東に行くと、谷八木川を渡ったところに「大久保公民館」があり、その建物の前に『大水害追悼之碑』が立っています。

大久保大水害から50年近い歳月が経過した平成6（1994）年10月に、犠牲者への鎮魂と後世にこの惨事を伝えるために大久保町自治会が建立したもので、碑文は下記のとおりです。

また、石碑の背面には犠牲になられた17名の名と享年が刻まれています。生後10ヶ月の子や2歳の子も含まれています。

大水害追悼之碑

当大久保町内の中央を横断する谷八木川及び東川が昭和二十年十月九日未明洪水の氾濫に依り尊い十七名の犠牲者が出る大惨事になりました。連日降り続く雨で山手方面の丘陵地帯の地盤が緩み、総ての池、山の下の番、松陰、松陰新田等各部落の溜池が悉く決壊し、国道二五線の橋と国鉄の鉄橋が流失する悲惨な状況でした。

時恰も大東亜戦争の終戦の直後で人々の心もすさみ今日の様な平和で豊かな世相ではありませんでした。五十年近い歳月が流れ、当町と致しまして犠牲になられた方々の御霊をおまつり致すべく今回公民館前に慰霊碑を建立し後世に伝えてほしい願いをこめて本碑を竣工した次第であります。



写真-12 大久保公民館前の「大水害追悼之碑」

■ 明治 30 年にも同じような大水害があった

「大水害追悼之碑」建立のおよそ 100 年前、大久保大水害からだとおよそ 50 年前に、同じような大水害があったそうです。

明治 30 (1897) 年、豪雨により上流部の溜池が決壊し、濁流が谷八木川に流れ込み、昭和 20 (1945) 年と同様に濁流が山陽本線の土手で堰き止められ、多くの被害が出ています。同じ地域で、同じような水害が繰り返されたわけです。

大久保町の住吉神社の西にある「記念碑」に、災害当時の状況が記されているらしい、ということで、現地に行って、石碑の写真を撮り、帰ってからパソコンで写真を拡大して解読を試みましたが、漢字カタカナ混じり文で、ここに記載するほどの解読ができませんでした。なので、参考資料『研究ノート：明石・大久保大水害の記録～昭和 20 年 10 月 9 日～』から掲載されている碑文を引用させていただきます。

明治 21 (1888) 年鉄道敷設事業が起り、東・西両川（現在の谷八木川と東川）を横断して線路を築造することになった。そこで、町の代表者は鉄道会社と交渉し、東川（現・谷八木川）は桁橋式、西川（現・東川）は隧道式で線路を敷設し、将来両川が氾濫した場合の備えとすることにした。しかしながら、明治 30 (1897) 年に未曾有の出水が発生し、多くの家屋・田畑が被害を受けた。

明治 21 (1888) 年に設けた桁橋や隧道では、排水面においてなお不十分であることが明らかになったのである。

そこで大久保村長をはじめ有志 4 名が代表して、鉄道会社と交渉を行うことになった。4 名は桁橋や隧道の幅を拡張するよう提議した。多くの改善点は実施されたが、桁橋と隧道の幅の拡張は認められなかった…（後略）

大正 15 (1926) 年 10 月

大久保村長



写真-13 住吉神社の西に立つ「記念碑」

結局、地元の要望は受け入れられず、桁橋と隧道は拡張されませんでした。そして、昭和 20 (1945) 年 10 月 9 日の大水害で再び甚大な被害が発生し、17 名の尊い命が失われました。

このような状況を踏まえてかどうかわかりませんが、平成 10 (1998) 年、谷八木川の桁橋（JR 山陽本線・東川橋梁）の拡張工事が実現しています（写真-14 参照）。施工主体は誰か、何の事業で実施したのか分かりません。

写真-14 の右側の谷八木川に架かる橋の名は、谷八木川の元の河川名を付した「東川橋りょう」と銘板に記されていて、竣工は、平成 12（2000）年 3 月となっています。

また、左側の谷八木架道橋は RC のボックスカルバートですが、銘板には、「2002 年 7 月、明石市建造」となっています。ここで、「明石市建造」となっていますが、鉄道近接工事なので、明石市は費用負担のみで、施工は JR 側が行っているはず。

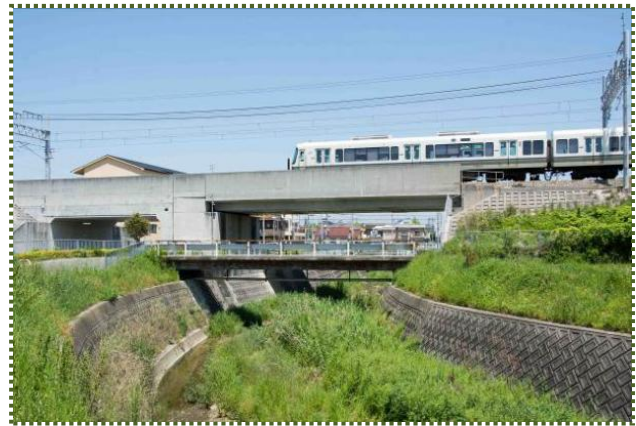


写真-14 JR 山陽本線（左は谷八木架道橋、右は東川橋梁）

■ モノローグ

昭和 40（1965）年代に釜谷池群の西側の丘陵地が造成されて高丘団地が誕生、丘陵地の南に広がる田園地帯も都市化が進み大久保台地一帯は大きく様変わりしました。

溜池も、その多くが造成に伴い埋め立てられてその数は大きく減少しています。気候変動に伴う集中豪雨が多発する中、このことをどのように捉えるのか。平成 6（1994）年に大久保大水害を追悼する石碑が建立されていますが、水害の教訓はどのように生かされているのでしょうか。万が一溜池が決壊することになれば、人口・資産の集積状況は戦後とは格段に違います。

なお、近年、豪雨などにより溜池が被災し甚大な被害が発生している状況を踏まえ、決壊による災害を防止することを目的として、令和元（2019）年 7 月 1 日「農業用ため池の管理及び保全に関する法律」が施行されています。

ムクドリ（椋鳥）

スズメ目ムクドリ科の鳥で、日本国内ほぼ全域に分布する留鳥。足および嘴は黄色い。釜谷池付近で撮影。椋（ムク）の実を好んで食べることが名前の由来だが、雑食性で植物の種子や果物、虫の幼虫などを好んで食べる。この日はモンシロチョウが犠牲になっていた。元々は、農作物につく虫を食べるので益鳥扱いだったが、近年は騒音と糞害で害鳥扱いされている。人間って身勝手なもんですね。



写真-15 ムクドリ

【参考資料】

- 1 『東播磨ため池歳時記 いなみ野ため池ミュージアム』 兵庫県東播磨県民局
いなみ野ため池ミュージアム運営協議会 平成 30 年 11 月
- 2 『明石の農村』 明石民俗文化財調査団編集 平成 27 年 3 月
- 3 『研究ノート：明石・大久保大水害の記録～昭和 20 年 10 月 9 日～』 森本真一 令和 8 年 6 月 28 日
<https://da.lib.kobe-u.ac.jp/da/kernel/90005210/90005210.pdf>
- 4 『えいがしま歴史まちあるき』 江井ヶ島文化遺産冊子作成委員会 平成 30 年 3 月
- 5 『印南野台地東端における廃止溜池の現状』 片山俊夫・森本真一 昭和 61 年 3 月
- 6 『災害をもたらした気象事例：阿久根台風』 気象庁 HP
<https://www.data.jma.go.jp/stats/data/bosai/report/1945/19451009/19451009.html>
- 7 『枕崎台風、阿久根台風、松陰新田、ムクドリ』 フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

※発行：令和 2（2020）年 10 月 『ひょうご水百景』 No.113

改訂：令和 8（2026）年 7 月 『ひょうご水百景』 No.113